

フランス語におけるアスペクトと その構成因子について

目 黒 士 門

目 次

§ 1. まえがき。—— § 2. アスペクトの諸定義。—— § 3. 動詞行為の時間的位置と時間的広がり。—— § 4. 時称とアスペクト。—— § 5. 動詞における連続概念と非連続概念。—— § 6. アスペクトの諸ジャンル。—— § 7. 瞬間相。—— § 8. 継続相。—— § 9. 反復相。—— § 10. 進行相。—— § 11. 起動相。—— § 12. 終結相。—— § 13. 結果相。—— § 14. アスペクトの複合性とその表現手段の多様性（結論）。

§ 1. ま え が き

アスペクト (Aspect) の概念は、今日では文法学の領域でかなり一般化しているように思われる。にもかかわらず、アスペクトはその定義上議論の余地がまだまだ残されており、また、アスペクト因子の分析やアスペクトの体系化の試みも、今までのところほとんど成功していないのが実情である。さらに規範文法の領域では、アスペクトというと何か余剰なものであるような印象すら与えている。その理由としては、フランス語の動詞体系にはアスペクト表出の指標となるような形態論的特徴が欠けており、その結果、組織的・均質的な方法によってアスペクトを把握できないという事情が指摘されている。さらにまた、フランス語の動詞体系のそのような性格から、研究者がアスペクトの問題をたんなる理論的興味の追求の方向へ逸したり、そうでもないにしてもアスペクトを時称解釈の一手段として利用するにとどめたりしているケースが多かったことにも反省の余地があるように思われる。

フランス語の動詞体系がアスペクトを組織的・均質的な方法で表現し得ないとしても、そのことはただちにフランス語におけるアスペクトの不存在を意味しないし、アスペクトの問題を「アスペクト的なもの」の理論的考察にとどめてよいことにもならない。また、アスペクトを時称解釈の一手段にとどめてしまうわけにもいかない。なぜなら——理由はいろいろあるが緊急な理由を1つだけあげるなら——実際のフランス語使用に当たって、動詞の事行 (procès) を完了か未完了か、開始・終止・継続・反復などのどの段階で示すのかを表わす必要がしばしば感ぜられるからである。このような必要にこたえるためには、伝統文法の動詞体系の欠陥を埋めるというよりは、むしろ伝統文法の動詞体系を離れた自由な立場で、いま一度、フランス語の動詞表現に再検討を加え、何らかの形で、フランス語におけるアスペクト表出の方法をまとめ上げておくことが望ましい。アスペクトという文法的カテゴリーが承認されるためには、すくなくともこのような試みが何度も繰り返し行なわれる必要があるのではあるまいか。たとえ体系化が困難でも。

本稿は、そのような目的を達成するための一つの予備段階として、フランス語にアスペクトが存在するという前提に立ち、従来行なわれて来たアスペクトの定義や分類に反省を加えつつ、アスペクト表現の構成因子を分析・整理づけることを目指すものである。

§ 2. アスペクトの諸定義

アスペクトの問題を考察するに当たって、現在一般にアスペクトと呼ばれているものはどのようなものか、そして、アスペクトにはどのようなジャンルが考えられているかを紹介しておくのが順当であろう。つまり、アスペクトの定義と分類である。

言語学者 Marouzeau は、その『言語学用語辞典』⁽¹⁾の中で、「アスペクト

(1) J. MAROUCZEAU, *Lexique de la terminologie linguistique, français, allemand, anglais, italien*. Paris, Geuthner, 1951.

とは、たとえば、動詞によって表わされる行為が一時的であるか (saisir) あるいは持続を有するか (supporter), 行為がその発端において考えられているか (attaquer) それともその展開において考えられているか (vivre), 行為それ自体において考えられているか (mener) それともある目的に対して考えられているか (amener), などによって行為をその展開において考える考え方である」と述べている。

文法学者 Grevisse の定義もほぼ同様であり、「動詞のアスペクトとは、動詞行為の展開において考えられた行為の性格であり、また、この行為の展開 (事行) *procès*) がどのような特殊な角度のもとに考えられているかという角度であり、また、この行為の《事行》がその展開の中でどのような段階 (phase) にあるのかという段階の指示である⁽²⁾」と述べている。そして、Grevisse は、主要なアスペクトとして次のものを指摘する。

1 時性 [瞬間相] (*aspect momentané*): *La bombe éclate.*

継続 [継続相] (*aspect duratif*): *Je suis en train de lire. Je le pourchasse.*

行為の開始 [起動相] (*aspect inchoatif*): *Il se met à rire. Il s'endort.*

反復 [反復相] (*aspect itératif*): *Je relis la lettre. Il buvotte son vin.*

連続・進行 [進行相] (*aspect progressif*): *Le mal va croissant.*

完了 [完了相] (*aspect perfectif*): *Elle a vécu, Myrto.*

未完了 [未完了相] (*aspect imperfectif*): *Je cherche une solution.*

近い未来 (*la proximité dans le futur*): *Il va lire, il est sur le point de lire.*

近い過去 (*la proximité dans le passé*): *Je viens de le voir.*

文法家 Ducháček は、アスペクトの体系化を試みた最近の論文『フランス

(2) M. GREVISSE, *Le bon usage, grammaire française avec des remarques sur la langue française d'aujourd'hui*. Gembloux, Duculot, 1936, 7^e éd. Paris, Geuthner, 1959. pp. 532-533.

語におけるアスペクトおよび動詞行為の性格の問題について⁽³⁾』の中で、動詞のアスペクトと動詞行為の性格を区別しつつ、次のように述べている。「動詞のアスペクト、これは、行為をあるいはその展開において（未完了相：il a cherché）、あるいはその完結において（完了相：il a trouvé）表わす表わし方である。…動詞行為の性格とは、行為およびその段階（phases）とその強さ（intensité）が展開されるばあいの展開の仕方である。動詞形態は、たとえば、1時性（il a piqué）、継続（il a chanté）、反復（il se levait à six heures）、開始（il s'endort）、連続（il est en train de travailler）、終結（il est accouru）、などを含み得る」と。そして、彼は、次の3つのアスペクトと15の動詞行為の性格を指摘する。

[アスペクト]

- 1° 未完了相または未終結相（imperfectifs ou non-conclusifs）
- 2° 完了相または終結相（perfectifs ou conclusifs）
- 3° 複アスペクト（biaspectuels）

[動詞行為の性格]

- 1° 1時的性格（caractère momentané）
- 2° 継続的性格（caractère duratif）
- 3° 進行的性格（caractère progressif）
- 4° 起動的性格（caractère ingressif）
- 5° 終局的性格（caractère terminatif） [これには最近終わったばかり

の行為を示す表現も含む。]

- 6° 結果的性格（caractère résultatif）
- 7° 近く行なわれる行為（action imminente）
- 8° 反復的性格（caractère itératif）
- 9° 習慣的反復の性格（caractère fréquentatif）

(3) O. DUCHACEK, *Sur le problème d'aspect et du caractère de l'action verbale en français*. (le français moderne, 34^e année, No 3, Juillet 1966)

- 10° 複合的性格 (caractère multiplicatif)
- 11° 配分的性格 (caractère distributif)
- 12° 強調的性格 (caractère intensif)
- 13° 緩和的性格 (caractère atténuatif)
- 14° 状態変化を表わす動詞 (les verbes qui désignent un changement d'état)
- 15° 使役動詞 (verbes factitifs)

以上に引用紹介した Marouzeau, Grevisse, Ducháček の3者によるアスペクトの定義と分類には、いろいろと批判異論の余地が残されているが、そのような批判はいずれのちほど折にふれて——あるいは別の機会に——行なうこととし、ここでは現在一般にアスペクトというものがどのように理解されているのかをごく表面的に示し、本論の出発点としたい。

§ 3. 動詞行為の時間的位置と時間的広がり

一般にアスペクトの名のもとに理解されているものが以上のようなものであるとしても、はたして、アスペクトはより根源的には何のカテゴリーなのか、つまり、いろいろな言語学者や文法学者がうち立てるアスペクトの諸ジャンルの関係をその根底で統一的に把握することを可能ならしめている基準は何か、という基本問題に立ち戻って考察してみなければ、上述の定義・分類が妥当かどうかとも検討できないし、問題の本質は不明のままに残されてしまう。アスペクトが1つの文法的カテゴリーとして承認されるためには、このような基本問題を避けて通ることはできないであろう。

さて、存在や事物すなわち名詞で表わされる「もの」が空間的にある位置 (place) とある広がり (étendue) を占めるように、動詞によって表わされる行為もある時間的位置 (place temporelle すなわち date) とある時間的広がり (étendue temporelle すなわち durée) を占める。このことを Bonnard

の例によって説明すると、⁽⁴⁾

Hier, j'ai déjeuné au restaurant.

において、動詞 *déjeuner* によって表わされる行為は、話者が話している日の前日の多分昼頃に行なわれた。つまりその行為の時間的位置は過去である。次に、動詞 *déjeuner* が表わす行為は30分なり1時間なりあるいは1時間半なりの時間的広がりをもって行なわれた。前者すなわち行為の時間的位置は時称によって示されているに対し、後者すなわち行為の時間的広がり、*déjeuner* という動詞に内在する意味論的性格によって示されている。行為の時間的位置を示す時称は動詞の形態によって極めて明白に表われるが、行為の時間的広がりとは形態上に表われていないので、その結果、われわれは行為の時間的広がりには気づかないでしまう。

次に問題を動詞行為の量的性格——時間的広がり——の性格——に限って観察すると、動詞が時間的に制限された行為 (*actions limitées*) を表わすばあいと時間的に制限されない行為 (*actions non-limitées*) を表わすばあいとがある。これは名詞が空間的に、あるいは非連続的であったり、あるいは連続的であったりするのと同じである。たとえば、*déjeuner*, *partir*, *s'écrier* などの動詞は、ある一定時間の終わりには、それらの行為は必然的に終局に達するが、*chanter*, *marcher*, *neiger* などは、ある任意の時間の間、間断なく延長し得る。たとえば、

Pendant toute la semaine qui suivit, il *garda* la chambre.

では、動詞 *garder* によって表わされる行為は、決められた時間 (1週間) の間ずっと継続したわけであるが、

Pendant toute la semaine qui suivit, il *déjeuna* au restaurant.

では、動詞 *déjeuner* によって表わされる行為は1時間ないし2時間で終わる行為であり、*garder* と同様の意味では延長できない。いうまでもなく、

(4) H. BONNARD, *Grammaire française des lycées et collèges pour toutes les classes du second degré*, Paris, S.U.D.E.L. 1950, p. 97.

このばあい *déjeuner* は 7 日間にわたって反復された行為である。

以上の諸例から解るように動詞行為の量的性格は形態的標識はなくとも、動詞の意味から察知でき、また動詞の意味によってその性格は異なってくる。このような動詞の表わす行為の時間的な広がり——動詞行為の持続時間 (la durée) ——の⁽⁵⁾カテゴリーをアスペクトとぶことにする。この定義に従えば、アスペクトは自ずとその領域が決まり、アスペクトの名のもとに考察すべき固有の問題が明らかとなる。

ところで、上に指摘したような例については、アスペクトは余りにも単純であり、話者はアスペクトをほとんど意識しない。あるいは、アスペクトが動詞の意味に内在しているがゆえに、話者はアスペクトを自明のこととして看過し勝ちである。にもかかわらずアスペクトの概念はフランス語にとって無縁ではあり得ない。なぜなら、話者が行為の持続時間をより仔細に表明したいと望むときには、アスペクトはさまざまな段階で、さまざまな方法で表現されるからである。

§ 4. 時称とアスペクト

前節では、時称——動詞行為の時間的位置——とアスペクト——動詞行為の時間的広がり——を区別し、前者は動詞の語形変化によって示され、後者は動詞の意味によって示されることを述べたが、この両者の関係は、なほ一層明らかにされねばならない。従来アスペクトは、あるいは動詞の時称により、あるいは成句（いわゆるアスペクトの助動詞）により表わされ、動詞の時称によるアスペクト表現は動詞の用法に含まれる問題として片づけられること

(5) この定義は目新しいものではなく、すでに半世紀近くも前、Vendryés がその著『言語』(J. VENDRYÉS, *Le langage, introduction linguistique à l'histoire*. Paris, La Renaissance du Livre, 1921, p. 117) の中で述べているし、他方、最近流行の構造言語学の方面でも、Galichet はその著『現代フランス語の構造的文法』(G. GALICHET, *Grammaire structurale du français moderne*, Paris-Limoges, Editions Charles-Lavauzelle, 1967, p. 90) の中にこの定義をとりいれている。

が多かったが、時称とアスペクトの基本的関係が明確にされていなければ、アスペクト表現に対する時称の役割すら、その真価が見失われる危険がある。時称とアスペクトの関係は、すくなくとも次の三つの観点から考察し得る。

第1は、時称とアスペクトの機能上の区別の観点である。前節で引いた例：

Hier, j'ai d'jeuné au restaurant.

において、時称は語形によって示され、アスペクトは動詞の意味によって示されることを述べたが、しかし、このことは時称とアスペクトが無関係だということを意味しない。ここで区別されているのは、時称的価値とアスペクト的価値である。現代フランス語における時称的価値の本領は、ある動詞行為が「行なわれた・行なわれる・行なわれるであろう」時 (date) の指示にある。つまり、話者が置かれている時間的環境から見て、ある行為を過去・現在・未来のいずれかに位置づける。従って、時称は行為の持続時間のカテゴリーを示すアスペクトとは機能を異にするのである。

第2は、時称とアスペクトの統辞法上の連帯関係である。上に述べた通り、時称とアスペクトは機能を異にしながら、同一の事行 (procès) に属する。アスペクトを示すのは動詞の意味であるが、そのことは本来動詞に内在する意味——辞書的段階における〈概念〉 (concept) としての意味——によってアスペクトが決まるということではない。概念としての動詞の意味は、いかなる文脈 (contexte) も状況 (situation) も与えられていないから、アスペクトは潜在的であり、アスペクトの詳細を規定し得ない。たとえば、動詞 〈parler〉 は、継続アスペクトをもつと一般に考えられているが、

D'abord, j'ai parlé à Pierre et il m'a répondu.

では、起動相 (動作の開始) が前面に表われている。他方、

Chaque matin, il m'a parlé de ses travaux.

では、もっとも顕著に認められるのは反復相（動作の反復）である。つまり、動詞は文の中で述語機能を演ずるとき、はじめて動詞の意味は現実的となり、アスペクトの詳細が表現される。そのばあい時称とアスペクトは同一の事行に参加しているがゆえに両輪の関係にある。このような意味で、動詞行為を現実化し、動詞のアスペクトの詳細を決める唯一の組織的手段は時称なのである。バイイのことばを借りるならば、「時称と接触するときに、アスペクトは、現実化された事行を量化する」のである。⁽⁶⁾

第3は、アスペクトの表現が直接に時称に含まれるばあいの時称とアスペクトの関係である。このばあいの関係はあくまで上述の第1・第2の観点をふまえて論ずることが大切である。なぜなら、このばあいの時称はアスペクト表現の一手段としての時称にすぎないからである。

ある種の時称は、多少とも強いアスペクト的価値をもっている。たとえば、

Hier, à midi, Pierre *d jeunait*.

における半過去時称は、時称的価値としては行為を過去に位置づけ、同時にアスペクト的価値としては継続相を示す。

時称のアスペクト的価値は複合過去において一層顕著である。

① Le 2 décembre 1804, Napoléon *est devenu* (= devint) empereur des Français.

② La carrière de Paul est brisée : il *est devenu* aveugle.

の比較において、①が単純過去と等価であるに対し、②は過去の行為から結果する現在の状態、すなわち現在完了相を表わす。これは、複合過去が単純過去の示す過去に対して、現在完了アスペクトを示していた古き時代の名残りである。

その他の時称もアスペクト的価値を有するが、しかし一般に時称のアスペ

(6) Ch. BALLY, *Linguistique générale et linguistique française*, Berne, A. Francke, 1950, p. 80.

クト的価値は充分でない。なぜなら、時称が含むアスペクト的価値は限られたばあいにはしか表われないし、また絶対的ではあり得ない。このことはいずれ第 6 節以下で詳述することにする。

§ 5. 動詞における連続概念と非連続概念

第 3 節では、アスペクトが持続時間のカテゴリーであり、動詞の意味によって決定されることを述べたが、本節では、アスペクトと動詞の意味の基本的関係をさらに明確にしておきたい。

ある種の動詞 (Ex. aimer, habiter, pleuvoir, etc.) はそれ自体で連続的意味をもっており、また別のある種の動詞 (Ex. accourir, naître, mourir, etc.) はそれ自体で非連続的意味をもっている。このような動詞の連続概念と非連続概念の区別はアスペクト分析に広く用いられている方法で、連続概念をもつ動詞は一般に進行中の行為を表現するので未完了相 (aspect imperfectif) に結びつけられ、他方、非連続概念をもつ動詞は一般に完了した行為を表現するので完了相 (aspect perfectif) に結びつけられる。第 2 節に引用した Ducháček もこの方法で未完了相と完了相を区別し、さらに、未完了相と完了相の双方を表わしうる動詞を複アスペクト (biaspectuels) としている。以下にこの 3 群の動詞分類を引用しておく。⁽⁷⁾

1° 未完了相または未終結相 (imperfectifs ou non-conclusifs): これはあらゆる時称において進行中の行為を示すアスペクトである。

aller, courir, nager, circuler, chasser, pourchasser, régner, boycotter, jalouser, aimer, compatir, consister, habiter, travailler, parler, converser, bavarder, causer, raconter, dormir, rêver, agoniser, appartenir, attendre, etc.

2° 完了相または終結相 (perfectifs ou conclusifs): これは半過去をのぞくあらゆる過去時称において、終結した行為を示すアスペクトである。

(7) O. DUCHÁČEK, *op. cit.* pp. 163-164.

accourir, atteindre, s'écrier, trouver, bondir, sursauter, apercevoir, naître, mourir, etc.

3° 複アスペクト (biaspectuels): これは文脈または状況に従って、あるいは完結した行為を指し、あるいは未完了の行為を示すアスペクトである。

lire, connaître, croire, occuper, se taire, etc.

動詞における連続概念と非連続概念の区別に基づいてアスペクトの区別を行なうことは、アスペクトの定義からして当然のことであるが、そこには注意すべきいくつかの問題が生ずる。

第1に、動詞のアスペクトが動詞の意味によって決まるとしても、上の分類のように不定形の姿のもとに概念的に示された動詞は、その動詞行為のおよその性格しか伝えず、アスペクトが明瞭になるためには、動詞が述語動詞として現実化されねばならない。このことはすでに前節で述べた通りである。事実、上に列举された動詞の性格が特定の文脈と状況においては容易に変化を蒙り、完了・未完了以外のアスペクトが重要な比重を占めるに至る(前節 parler の例参照)。

第2に、上の分類の第1群(未完了相)と第2群(完了相)に分類される動詞の数は限られており、それ以外の大部分の動詞の意味論的内容は、いかなるアスペクト概念も含んでいない。従って、この種の分類には限界がある。

第3に、第3群(複アスペクト)のグループは、第1群・第2群とは当然区別してかからねばならない。複アスペクトとは実際にそのようなアスペクトがあるのではなく、アスペクトの可能性を指した語である。いわゆる単純意味関係は言語の理想状態に過ぎず、ラングの段階では大部分の語は多義的であるから、同じ段階でアスペクトが複アスペクトとなるのは当然である。しかし、実はある種の多義的な動詞が複アスペクトであることは、アスペクトが文脈と状況によって支配される意味に基づくことを逆に証拠立てている。

のである。

第 4 に、第 2 群の完了相についてさらに付言すれば、半過去においてはアスペクトは完了相ではない (Ex. Il mourait)。フランス語では、あらゆる時称において完了の概念を示す動詞は存在しない。このことはフランス語における時称体系の発達を物語るものである。

以上のような問題点を考慮にいれると、フランス語では、連続概念と非連続概念を基準に概念的な動詞分類を行なうことはアスペクトを考える上である限られたばあいには有効でない。問題となるのは現実化された事行であり、そのためにはどうしても文脈と状況を考慮にいれなければならない。文脈と状況は動詞の意味を決定し、動詞の意味はアスペクトを決定するからである。

§ 6. アスペクトの諸ジャンル

かくして、アスペクトの分析は、述語動詞の意味の分析から始まるが、述語動詞の意味を決定するさまざまな要素はアスペクト表現の構成因子であるといえる。本稿では、以下に、そのようなアスペクトの構成因子の分析を試みることになるのだが、その前に、われわれは、アスペクトの定義——アスペクトとは動詞行為の持続時間 (durée) のカテゴリーである——から、いくつかのアスペクトのジャンルを予想できる。「持続時間 (durée) とは、ある一つの現象に対して、二つの極限 (初めと終わり) の間に流れ去る時間的広がりである⁽⁸⁾」。従って、第 1 に、時間的広がりがあるか否かにより、継続相 (aspect duratif) と瞬間相 (aspect momentané) の区別が考えられる。第 2 に、持続時間 (durée) の両極限である「初め」と「終わり」に着目することにより、起動相 (aspect inchoatif) と終結相 (aspect terminatif) が区別される。このばあい、行為の終結それ自体を問題とする終結相と並ん

(8) P. ROBERT, *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*. Paris, Le Robert, 1967.

で、行為の結果を問題にする結果相 (aspect résultatif) が隣接アスペクトとして考えられる。第3に、ある行為に時間的広がり認められるばあい、上記継続相のほかに反復相 (aspect itératif) と進行相 (aspect progressif) が考えられる。これら予想されるアスペクトをまとめると次表の通りとなる。

瞬間的行為	瞬間相 (aspect momentané)
継続的行為	1. 継続相 (aspect duratif) 2. 反復相 (aspect itératif) 3. 進行相 (aspect progressif)
行為の開始	起動相 (aspect inchoatif)
行為の完了	1. 終結相 (aspect terminatif) 2. 結果相 (aspect résultatif)

以下、本稿では上表の7つのジャンルを中心にそのアスペクト因子を考察して行くことにするが、そのばあいこれら7つのアスペクト・ジャンルに関連するアスペクト的性格も当然考察の対象となる。

§ 7. 瞬間相 (aspect momentané)

瞬間相または1時相と呼ばれるアスペクトは、行為の瞬間的性格を表わす。ここで瞬間的 (momentané) というのは、「qui ne dure qu'un moment」の意であり、一般に極めて短いがある程度の持続 (durée) が認められる。たとえば、「Il est mort.」は瞬間相であるが死亡の行為にはある程度の持続がある。

瞬間相は次の手段により表わされる。

(1) 動詞の意味内容。

La bombe éclate. (Grevisse)

Je suis vite accouru. (La Fontaine)

(2) 時称。文語では前過去 (passé antérieur), 口語では重複合時称

(temps surcomposés) が瞬間相の觀念を表わすことができる。前過去も重複合時称も独立節で動作の迅速な完了を表わすからである。

このばあいの前過去は、一般に時の状況補語 *bientôt, vite, à peine, en un moment, en un instant*, などを伴なう。

Le chien eut dévoré le pain en un moment.

La cigogne au long bec n'en put attraper miette,

Et le drôle eut lapé le tout en un moment. (La Fontaine)

Cependant la douceur de la température, la beauté du ciel, nous eurent bientôt distraits de nos pensées. (L. Veillot)

重複合時称のばあいも、時の状況補語を伴なうのが普通である。

Ah ! ils avaient eu vite tourné le câble autour des bittes.

J'aurai eu bientôt fini ce travail.

Comme elle a eu vite fait de ramasser toutes ces cartes et de se remettre au jeu ! (F. Mauriac)

このように時称が時の状況補語によって補強されているところを見ると、時称のアスペクト的価値は微弱だといわねばならない。また、前過去・重複合時称以外の時称も瞬間相を表わすことができるし、逆に、前過去・重複合時称も瞬間相以外のアスペクトを示し得る。それゆえ、時称はアスペクト的価値を有しているとはいえ、その価値は絶対的ではない。ある時称が唯一のアスペクトを表わし、逆に、あるアスペクトが唯一の時称によって表わされるということはないのである。

(3) 状況補語。前項で見た通り、状況補語は、時称のアスペクト的価値を補強する機能をもつが、時には、瞬間相が状況補語のみによって表わされることがある。すなわち、*soudain, soudainement, vite, à l'instant, sur-le-champ, bientôt, dans l'instant même, en un clin d'œil, en un moment, en un instant*, など。

Il disparut en un clin d'œil.

La question fut réglée *sur-le-champ*. (*Le Petit Robert*)

Soudain retentit un glas rauque. (A. Gide)

Il a emmené sa femme *à l'instant*.

(4) 迂言法 (*périphrase*) または分析的表現。単純動詞の使用が行為の瞬間的性格を十分に表現し得ないばあいには、単純動詞の代わりに「動詞＋名詞」のような動詞句的構成の述語表現を用いてアスペクトを明瞭にすることが出来る。たとえば、〈Il regarda〉では、アスペクトは瞬間相か継続相か不明である。これを〈Il jeta un regard rapide〉または、〈Il jeta un coup d'œil〉のように言い換えることによって、行為の1時的性格が明らかになる。⁽⁹⁾

Il téléphona. → Il donna un coup de téléphone.

Il recula. → Il eut un recul. Il eut un mouvement de recul.

Il cria. → Il poussa un cri.

§ 8. 継続相 (*aspect duratif*)

継続相は動詞行為の継続的性格を示す。継続相を表わす手段はフランス語ではとくに豊かであるように思われる。

(1) 動詞の意味内容。一口に動詞の意味と言っても、動詞が示す継続的意味にはさまざまな段階があることに注意しなければならない。

Jeanne et le baron *soup`rent* en tête en tête. (Maupassant)

Elle *songea* au passé, à l'avenir, à la rapidité de la vie. (A. de Musset)

Il *pleure* dans mon coeur comme il *pleut* sur la ville. (Verlaine)

(2) 時称。半過去 (*imparfait*) は過去における行為の継続を示す。

(9) Ducháček は前掲論文の中でこの種の迂言法を詳しく分析している。この構成でひんばんに用いられる動詞は、avoir, faire, donner, jeter, pousser である。また、その構成要素となる名詞の中でしばしば用いられるのは、coup, cri, regard, geste および rire である。

Que *faisiez-vous* au temps chaud ? (La Fontaine)

Les citoyens romains *regardaient* le commerce et les arts comme des occupations d'esclaves : ils ne les *exerçaient* point. (Montesquieu)

半過去がつねに 継続を表わすとは限らない。反復を表わす (cf. § 9) ほか、とくに注意すべきは、絵画的描写の半過去および自由間接話法である。

La chèvre blanche *franchissait* d'un saut de grands torrents qui *l'éclaboussaient* au passage de poussière humide et d'écume. Alors, toute ruisselante, elle *allait* s'étendre sur quelque roche plate et *se faisait* sécher par le soleil. (A. Daudet) [絵画的描写の半過去]

Mais le marchand s'écria qu'elle *avait* tort ; ils *se connaissaient* ; est-ce qu'il *doutait* d'elle ? Quel enfantillage ! Elle insista cependant pour qu'il prît au moins la chaîne. (Flaubert) [自由間接話法]

(3) 状況補語。行為の継続期間が状況補語によって示されるばあいには、その状況補語は継続相を明示する働きをもつ。

J'ai *longtemps réfléchi* durant ces mois d'hiver. (A. Gide)

Il travailla *toute sa vie*. (Bonnard)

(4) 〈être + 現在分詞〉の構文。

Il *est h'sitant*. Il *est mourant*.

この種の構文を継続相の因子と見なすことには問題がないではない。なぜなら、フランス語では現在分詞が主語の属詞となるときには、動詞的形容詞であり、主語と性数の一致が必要である。上例は、女性形では、〈Elle *est h'sitante (mourante)*〉となるはずで、通常の〈主語 + 動詞 + 属詞〉の構文と変わらない。しかし、être は状態を表わす動詞であり、状態はつねにある継続時間をもつから、継続相を示していることに変わりはない。

Elle avait toujours été pauvre, toujours *empruntant*, toujours *dépensant*. (Alain-Fournier)

この例では、*empruntant* と *dépensant* は明らかに現在分詞であるが、

動詞 *être* から切り離されている。

要するに、英語の〈be+現在分詞〉の構文に認められるような継続相は、フランス語の〈*être*+現在分詞〉の構文には認めがたい。

(5) 準助動詞。継続相をもっとも明瞭に示す方法は、アスペクトの助動詞 (*auxiliaires d'aspect*) と呼ばれる準助動詞の使用である。

être en train de: Quand je l'ai rencontré dans l'escalier, Salamano *'était en train d'insulter* son chien. (A. Camus)

être sur le point de: Le gouvernement *est sur le point de* prendre telle décision. (*Le Petit Robert*)

être à: Il *est à* travailler. La voiture *est à* réparer.

être après à (古語): Il *est après à* bâtir sa maison. (*Académie*)

(6) 継続を意味する動詞。continuer, poursuivre, durer, persister などの動詞は、(1)に述べた動詞とは別に、それ自身継続を意味する。これらの動詞は本動詞として用いられても準助動詞として用いられても、継続相を表わす。

Continuez de chanter et *de* souffrir; c'est le plus noble état. (Sainte-Beuve)

Le paysan français *continue à* nourrir le tisserand français. (A. Maurois)

Chacun de nos concitoyens avait *poursuivi* ses occupations. (A. Camus)

〈ne pas cesser de+不定形〉も継続を表わす。

Elle avait conscience que sa volonté *n'avait pas cessé d'agir* sur son destin. (Martin du Gard)

(7) 状態を表わす動詞。状態はつねにある継続時間をもつから、*être*, *rester*, *demeurer* などの状態を表わす動詞は継続相を示す。

Il *a été* assis. Il *est resté* debout.

Il est demeuré immobile.

とくに、前置詞を先立てた名詞で構成される動詞句では、継続相が明瞭に表われる。

Il est en classe (en marche, en voyage, en sueur, en bonne santé, en route).

Les cerisiers sont en fleurs (en floraison).

このばあい、名詞が前置詞句を先立てることもある。

Il est en face du danger. Il est hors de danger. Il est en état d'ivresse.

§ 9. 反復相 (*aspect itératif*)

反復相は行為の反復的性格を表わすアスペクトであるが、一口に反復と言っても、たんに2回ないし数回の反復から極めて規則的・習慣的反復までさまざまである。一般に習慣的な反復は、習慣的反復相 (*aspect fréquentatif*) として反復相とは区別されているが、アスペクト表現の手段の観点からは、両者の間に特別な差異は認められないので、ここでは一括して取扱う。反復相は次の方法により表わされる。

- (1) 動詞の意味内容。とくに接頭辞 *re-* で始る動詞。

Il relis tous les jours sa lettre.

- (2) 時称。半過去 (*imparfait*) および大過去 (*plus-que-parfait*) は過去における行為の反復や習慣的反復を示す。このばあい、時称は一般に, *parfois, quelquefois, souvent, chaque fois, tant, toujours, tous les jours, habituellement, ordinairement, chaque matin, chaque soir, tous les ans* などの状況補語を伴なう。

J'allais le voir tous les jours.

A Paris, quand nous avions fini de travailler, nous allions chaque jour nous promener.

Un malheureux *appelait* tous les jours la Mort à son secours.

D'ordinaire, au commencement de la classe, il *se faisait* un grand tapage qu'on *entendait* jusque dans la rue, ... (A. Daudet)

Dès que sa mère *était revenue* des vêpres, il lui *consacrait* la fin de la journée. (F. Mauriac)

(3) 状況補語。行為の反復的性格は状況補語のみによっても表わされる。このばあい、状況補語は、反復の回数を明示したり、漠然と反復を示したり、あるいは習慣的行為を示したりする。

Il vient nous voir *tous les jours à la même heure*.

Deux fois par jour, à onze heures et à six heures, le vieux mène son chien promener. (A. Camus)

J'allai le voir *en tout trois fois* pendant ce temps-là.

J'ai tiré *encore quatre fois*. (A. Camus)

Sa tête cognait un peu sur la console. *De temps en temps* il s'y frottait lentement l'occipital, d'un mouvement naturel de cerf. (Vercors)

Il va *tant`t chez l'un, tant`t chez l'autre*.

(4) 準助動詞。習慣的行為は動詞句 avoir coutume de, avoir l'habitude de などによって明示される。

Il *n'avait pas coutume de* manquer la messe. (G. Sand)

J'*ai l'habitude de* boire du café après chaque repas.

§ 10. 進行相 (*aspect progressif*)

進行相または漸進相は、継続相の隣接アスペクトである。行為のたんなる継続的性格を表わすのが継続相であるに対し、継続的行為の中に漸進的・進行的性格が認められるばあい、進行相が問題となる。進行相は次の手段により表わされる。

(1) aller + 現在分詞 (または *gérondif*)。

Les vivres *vont augmentant* de prix chaque jour. (Brunot)

Le mur *va s'écroulant*. (Brunot)

J'ai depuis hier un rhumatisme qui ne *va qu'en empirant* d'heure en heure. (G. Flaubert)

Mais l'impression de sa première rencontre avec la misère du monde *ira en s'atténuant*. (R. Rolland)

(2) 準助動詞 être en voie de :

Il est *en voie de* réussir. (Brunot)

(3) 状況補語。進行相は、また副詞句 toujours moins, toujours plus, de plus en plus, de moins en moins, de jour en jour, d'heure en heure, などによって表わされる。

A mesure que le pouvoir se sécularisait et passait en des mains incrédules, le peuple juif vivait *de moins en moins* pour la terre. (Renan)

Les habitants de Parva domus s'occupaient *de moins en moins* de leur enfant. (A. Daudet)

(4) 動詞の反復。

Et la neige tombe, tombe. (Ducháček)

動詞の反復がつねに進行相を表わすとは限らない。行為の反復または魂の動きを表わすばあいもある。

Il entassait adage sur adage, Il *compilait, compilait, compilait*. (Voltaire)

§ 11. 起動相 (aspect inchoatif ou ingressif)

動詞が行為の開始を表わすばあい、その動詞のアスペクトは起動相である。近く行なわれる行為 (action imminente) を表わす動詞表現もこの種のアスペクトに含まれる。起動相は次の手段により表わされる。

(1) 動詞の意味内容。commencer, recommencer, se mettre, se remettre, s'épanouir, s'emporter, s'enflammer, s'en dormir, s'encolérer, démarrer, déchaîner, déclencher, égayer, échauffer, s'élancer, etc.

(2) 準助動詞。commencer à, recommencer à, se mettre à, se remettre à, se prendre à, partir à, etc. のいわゆるアスペクトの助動詞は動詞不定形を伴なって起動相を明示する。

Il *commence* à goûter le bonheur. (Chateaubriand)

Ils *se mirent* alors à trotter doucement. (Maupassant)

A la longue, il *se prit* à le dire sans y songer. (C. Farrère)

Nous sommes *partis* à rire.

上と同じ動詞は補語名詞（目的補語または状況補語）を伴なって行為の開始を示すことができる。

Il m'a mis au courant, en fureur, en colère, dans une grande colère.

Il se mit en marche, en mouvement.

Mettre en train, en service, en vente, en action, en pratique, en usage.

Prendre parole, connaissance, le contact, la fuite, la maladie, etc.

(3) 状況補語。行為の開始が副詞句によって示されることがある。

D's lors, il décida de partir. (*Le Petit Robert*)

Il y a dix minutes qu'on vous cherche.

(4) 物語体不定形。物語体不定形 (infinitif de narration) は行為の開始の意味を含む。すなわち成就した事実としての行為の発端を示す。

Ainsi dit le renard — et flatteurs *d'applaudir*. (La Fontaine)

Et pains d'épice *de voler* à droite et à gauche, et filles et garçons *de courir, de s'entasser* et *s'estropier*. (J.-J. Rousseau)

(5) 前置詞。ときには前置詞が動詞に開始の意味を与えることがある。

Tu vas *dans* la vie comme un Turc, en riant, en trouvant que tout

est bien, que tout est facile. (J. Anouilh)

近く行なわれる行為 (action imminente) は、次の方法により表わされる。

(1) 準助動詞 *aller* + 不定形。このばあい、*aller* は直説法現在または直説法半過去におかれる。〈*aller* の直説法現在 + 不定形〉は近接未来 (*futur prochain ou immédiat*) とよばれる構成である。

Qu'est-ce que le Seigneur *va donner* à cet homme? (V. Hugo)

Je *vais aller* travailler à la bibliothèque. (Sartre)

準助動詞 *aller* が半過去におかれるのは、過去のある時に対し、その直後の行為が問題となるばあいである。

Le concert *allait commencer*. (R. Roland)

Elle était descendue chez les Barbatane à Paris, elle *allait repartir* pour sa province. (Aragon)

近く行なわれる行為は〈*aller* + 不定形〉の構成以外にも、*devoir*, *vouloir*, *être en voie de*, *être en passe de*, *être près de*, *être pour*, etc. によっても表わされる。

Son procès *doit passer* prochainement. (Grevisse)

Il *veut pleuvoir*. (Brunot)

Il *est en voie de réussir, de s'accommoder*. (Grevisse)

Hélas! ce sont ces mêmes hommes qui *sont en passe de nous gouverner* demain. (A. Gide)

Il *est pr s de partir*. (Grevisse)

Cela *n'est pas pour durer*. (Molière)

Elle en a eu des maux pour moi, maman! elle avait quarante-deux ans quand elle *a été pour m'avoir*. (Goncourt)

(2) 状況補語。前項の準助動詞はしばしば時の状況補語によって補強さ

れる。また、準助動詞を使用せずに、状況補語のみによって間近な行為を表わすこともある。主要なものは、*bientôt*, *aussitôt*, *immédiatement*, *à l'instant*, *à la minute*, *avant peu*, *sous peu*, *avant longtemps*, *prochainement*, *tout à l'heure*, *tout de suite*, etc. である。

Mme Garcia va venir *tout de suite*. (A. Maurois)

Je suis à vous *tout à l'heure*, j'ai quelques papiers à brûler. (Vigny)

Il viendra aussitôt (*immédiatement*).

§ 12. 終結相 (*aspect terminatif*)

動詞が行為の終結を表わすばあい、その動詞のアスペクトは終結相である。終結相は、最近完了した行為 *action récemment accomplie* を含む。終結相は、次のようなさまざまな手段により表わされる。

(1) 動詞の意味内容。finir, terminer, achever, accomplir, cesser, accourir, arriver, atteindre, parcourir, parfaire, parvenir, remporter, déchiffrer, décolérer, déchiqeter, découper, débâter, débloquer, etc.

(2) 準助動詞。上の動詞のあるものは、finir de, finir par, achever de, cesser de, etc + 不定形の構成で準助動詞として用いられる。

Il a *fini de* déjeuner. (Bonnard)

Elle espérait que si le petit frère persistait à vivre, on *finirait par* prendre la résolution de le tuer. (Ch.-L. Philippe)

J'ai *achevé de* ranger mes papiers. (A. Gide)

Toutes les fois que j'ai *cessé d'*aimer une femme, je le lui ai dit.
(A. de Musset)

(3) 迂言法。prendre fin, toucher à sa fin, mettre fin à, mettre terme à, arriver à sa fin, arriver à son terme, etc. の終結を意味する動詞句を使用する。

La réunion a *pris fin* très tard. (*Le Petit Robert*)

La nuit *mit fin* au combat. (*Le Petit Robert*)

Elle *touchait* enfin *au terme* de ses tribulations. (*Martin du Gard*)

Cette blessure *mit terme* à son activité.

(4) 状況補語。終結相はまた副詞あるいは副詞句によっても表わされる。

Il a chanté le chant *jusqu'à la fin*.

Il a bu *jusqu'au bout*.

Il a bu le calice *jusqu'à la lie*.

最近終わったばかりの行為 (*action récemment accomplie*) は次の手段で表わされる。

(1) 準助動詞。〈*venir de, ne faire que de, sortir de*〉は、不定形を伴って、最近終わったばかりの行為を表わす。

これらの準助動詞のうち、もっとも一般的なのは〈*venir de*〉であり、近接過去 (*passé récent*) と呼ばれる。*venir* は、直説法現在または半過去におかれる。

Il *vient de* me téléphoner. (*Brunot*)

Je *viens de* quitter un ami. (*Chateaubriand*)

La chaleur *venait d'éloigner*. (*Stendhal*)

〈*ne faire que de*〉も直説法現在または半過去におかれる。

Je *ne fais que d'arriver*. (*Brunot*)

Le soleil *ne faisait que de paraître* à l'horizon lorsque le frère d'Amélie ouvrit les yeux. (*Chateaubriand*)

同じく 〈*sortir de*〉も直説法現在または半過去におかれる。

Tu vas en prendre un verre avec moi, dit-elle. — Non, merci, je *sors d'avaler* le mien. (*E. Zola*)

Il *sortait de lire* Rousseau. Il était plein d'élans ... (*R. Benjamin*)

ただし、〈sortir de〉のこの種の用法は通俗的であるという。⁽¹⁰⁾

(2) 時称。文語では前過去 (*passé antérieur*)、口語では重複合過去 (*passé surcomposé*) が、最近終わったばかりの行為を表わすことができる。前過去も重複合過去も、時の副詞節に用いられて、主節の動詞が表わす行為の直前に完了した動作を表わすからである。

Aussitôt, qu'il *eut compris* la plaisanterie, il se mit à rire.

Quand le ciel m'a *eu donné* une fille, je l'ai appelée Noémi. (Renan)

(3) 状況補語。最近終わったばかりの行為は、副詞のみによっても表わすことができる。

Où est votre frère? — Il sort *à l'instant*.

Il y a un moment que je l'ai vu.

時には副詞も省略される。

Y a-t-il longtemps que vous êtes à Paris? — *J'arrive*.

§ 13. 結果相 (*aspect résultatif*)

結果相は終結相の隣接アスペクトである。終結相が行為の完了または終止それ自体を表わすに対し、結果相は、完了した行為の結果である状態を表わす。

フランス語では結果相は、時称 (複合時称) によって表わされ得る。しかし、すでに述べた通り、時称は多価値であるから、時称による結果相の表現は不完全といわねばならない。

(1) 複合過去。現代フランス語の時称的価値としては、複合過去 (*passé composé*) は単純過去 (*passé simple*) に代わって過去の動作を表わすが、本来は複合過去はいわゆる現在完了形であり、過去に完了した動作の結果である現在の状態を表わした。たとえば、*J'ai écrit une lettre*. というとき、*avoir* は今日では「所有する」の意味を失ない、過去分詞とともに複合時称

(10) F. BRUNOT, *La pensée et la langue*. Paris, Masson, 1927, p. 486.

を構成し、単純過去と等価の過去を表わすが、古くは、*J'ai écrit(e) une lettre. J'ai une lettre écrite.* 双方の構文が行なわれ、「私は書かれた手紙をいまもっている」の意味であった。つまり、過去に完了した動作の結果としての現在の状態である。

この現在完了すなわち結果相を表わす複合過去本来の用法は、現代フランス語においても失なわれたわけではなく、複合過去は今日もなお、時称的価値以外に、アスペクト的価値をもっている (cf. § 4. 時称とアスペクト)。

Vous ne la trouverez plus : elle est morte.

Je ne l'ai pas vu depuis huit jours.

Oh ! ne regrettons pas le passé, murmura-t-elle. A présent, j'ai tourné le page. (A. Gide)

複合過去が現在または未来の動作の結果である未来の状態を表わすこともある。これは前未来の代用である。

As-tu bientôt fini de te moquer du monde ? (R. Rolland)

Si je commence aujourd'hui, je n'en ai pas fini. (R. Rolland)

複合過去はまた過去に完了した事実を現在と連関する体験として表現する。つまり、経験を表わす現在完了である。

Il aida sa femme à descendre les marches de l'embarcadère. Pierre Villiers, déjà embarqué, la reçut presque dans ses bras, et l'entendit avec précaution sur les chiraz bariolés ... avec précaution, — car on a vu des chavirer au quai, sous le pied d'une passagère trop brusque ... (C. Farrère)

(2) 前未来。現在または未来の行為から結果する状態はしばしば前未来 (futur antérieur) によって表わされる。

Dans deux ans j'aurai passé mon baccalauréat.

Et puis, il y a tout même moi qui aurai vécu ici six ans. (Benoît)

(3) その他の複合時称。その他、前過去 (passé antérieur)、重複合過去

(passé surcomposé), 大過去 (plus-que-parfait), 重複合大過去 (plus-que-parfait surcomposé), 重複合前未来 (futur antérieur surcomposé), 命令法過去 (impératif passé), 条件法過去 (conditionnel passé), 条件法重複合過去 (conditionnel passé surcomposé), 接続法大過去 (subjunctif plus-que-parfait) など, ほとんどすべての複合時称が結果相を表わすことができる。(紙数の都合上, ここでは, 二三の例をあげるにとどめる。)

Il *aura* bientôt *eu dépensé* les cents francs que vous lui avez donnés.
Soyez *revenus* pour dîner.

Nous *aurions eu rentré* la récolte avant la nuit, mais un orage a éclaté.

§ 14. アスペクトの複合性とその表現手段の多様性

以上, §§ 7~13 にわたって, フランス語におけるアスペクトを7つのジャンルに分類し, ⁽¹¹⁾ そのおのおののアスペクト構成因子の分類と記述を試みた

- (11) フランス語の動詞アスペクトのすべてがこの7つの枠組の中に収められ得るのか? この7つの枠組からこぼれ落ちるアスペクトがあるのではないか? このような疑問や批判が当然出てこよう。

たとえば, いわゆる完了相 (aspect perfectif) と未完了相 (aspect imperfectif) は本稿では設けていない。Marouzeau は, 完了相については「終結に達したものとしてとらえられた行為のアスペクトである。chercher が未完了であるのに対し, trouver は完了的意味をもつ」(*Lexique de la terminologie linguistique*, p. 171) と述べ, 未完了相については「行為の開始も終わりも考慮せず, その経過においてとらえられた行為のアスペクトである」(ibid., p. 116) と述べているが, 完了相は本稿の終結相に, 未完了相は継続相に相当する。事実, Ducháček は「1時的, 起動的, あるいは終結的性格をもつ諸形態は一般に完了相である。継続的, 連続的, 漸進的, 反復的, 習慣的, 複合的, あるいは配分的性格を含む諸形態はたいていのばあい未完了相である」(*op. cit.*, p. 183) と述べている。終結相と継続相のほかに, 完了相と未完了相の区別を設けることは, 問題をいたずらに煩瑣にするのみで実際的ではないように思われる。

また, 強調相 (intensif) と緩和相 (atténuatif) を設けることも行なわれているが, これはアスペクトの問題であるよりは, むしろ文体論に属する事柄である。

その他, Ducháček の指摘する複合相 (multiplicatif) と配分相 (distributif) も継続相ないしは反復相の変種であるから, 本稿では独立のアスペクト・ジャンルを設けない。

が、以上の分析からフランス語には動詞のアスペクトが存在することが確認できる。

ところで、このように分析されたいろいろなアスペクトは一般に相互に交錯し合っており、その結果、ある動詞が単一なアスペクトを表わすことは稀で、たいていのばあいには、ある動詞または動詞句は2つか3つのアスペクトを同時に表わしている。たとえば、

Chaque matin, il m'a parlé de ses travaux.

においては、動詞は反復相であり継続相である。そして時には文脈により結果相を表わすこともある。同様にして、

Il a chanté le chant jusqu'à la fin.

では、終結相と継続相が認められ、また、

Et la neige tombe, tombe.

では、継続相と進行相が認められる。アスペクトの表われ方のこのような性質から、アスペクトの複合性を結論づけることができる。

次に、アスペクトの表現因子そのものについては、§§ 7~13 で詳しく見た通り、さまざまな方法が用いられるわけであるが、その主要なものは、動詞の意味内容、時称、状況補語、迂言法、準助動詞などである。これらのアスペクト構成因子の働きとその相互関係を要約して第2の結論としよう。

まず、第1に、動詞に内在する意味内容は潜在的であり、特定の文脈と状況においては容易に変化を蒙る (§ 4) とはいえ、ある限られたばあいには動詞の意味内容がそれ自体充分にアスペクトを示し得る。しかし大部分の動詞はいかなるアスペクトをも示さなかったり、アスペクト表示の力が乏しいため、次の第2以下の方法に訴えることになる。

第2に、時称はさまざまなアスペクト表現の因子となっている (§§ 7, 8, 9, 12, 13)。しかし、多くのばあい時称のアスペクト的価値はかなり制限されている。たとえば、半過去形は継続相を表わすが (§ 8)、それは「過去における」継続に過ぎない。また半過去は継続相以外のアスペクトをも示すは

か、本来の時称的価値も多様である。このことは他の時称についても一般に事情は同じであり、時称はきわめて多価値だといえることができる。その結果、多くのばあい、時称のアスペクト的価値は、さまざまな状況補語に助けられてはじめて明瞭になる。時称のアスペクト的価値は、今まで考えられていたよりも遙かに流動的でかつ微妙である。

第3に、上に述べた時称のアスペクト的価値の流動的で微妙な性格から、必然的に状況補語が重要な役割を担うことになる。事実、§§7~13のアスペクト・ジャンルのすべてにおいて、状況補語がアスペクトを明示するために重要な働きを演じていることをわれわれは如実に見たのである。

第4に、迂言法は動詞のアスペクト的性格が微弱であったり、あるいはそれを全然欠くばあいに、類義表現によってアスペクトを明確に示す重要な統辞論的意味論的方法である。迂言法は、一般に単純動詞を動詞句によって置き換えるが、そのばあい、動詞句は「動詞+名詞」の構成をとることが多い。

第5に、迂言法と並んで、準助動詞の使用はアスペクトを明示する重要な因子である。迂言法が動詞それ自体を別の動詞句で置き換えるに対し、準助動詞は、その名の通り本動詞の前に置かれて助動詞的に用いられる。

アスペクト表現にはその他の因子もあることはすでに見た通りであるが、フランス語では一般にこれらの5つの主要な因子がケース・バイ・ケースで併用される。もちろん、これらの因子のいずれか1つだけが用いられるばあいもあるが、たいていのばあいには、これらさまざまな因子のうちの2つあるいは3つが相互に協力し合ってアスペクトをより明確にする。このような現象は、フランス語が形態的段階においてアスペクト表示の均質的方法に欠けていることから起こるのであるが、逆に言えば、フランス語はアスペクト表現のために実に豊かな手段を擁しているのである。

さらに付言するならば、従来「アスペクトの助動詞」と呼ばれる因子のみが繰り返しの観察される現象として文法範疇に属するとされて来たが、そ

れ以外の因子も同じく繰り返しの規則的現象であるのみならず，上に見た通りアスペクト表現の諸因子の相互的連関性が確認される以上，「アスペクトの助動詞」以外の因子にも十分な顧慮が払われるべきである。